

アウクスブルク市の公共政策

山本 七海

1. はじめに

私は現在、大学で法学部に所属しており、公共政策に興味を持っています。そのため、アウクスブルク市が展開する公共政策について調査し、地域社会におけるその影響を分析することを今回の報告書のテーマとして設定しました。当初は、市が運営する公共施設に焦点を当て、それらが地域住民の生活にどのように貢献しているかを調べる予定でした。

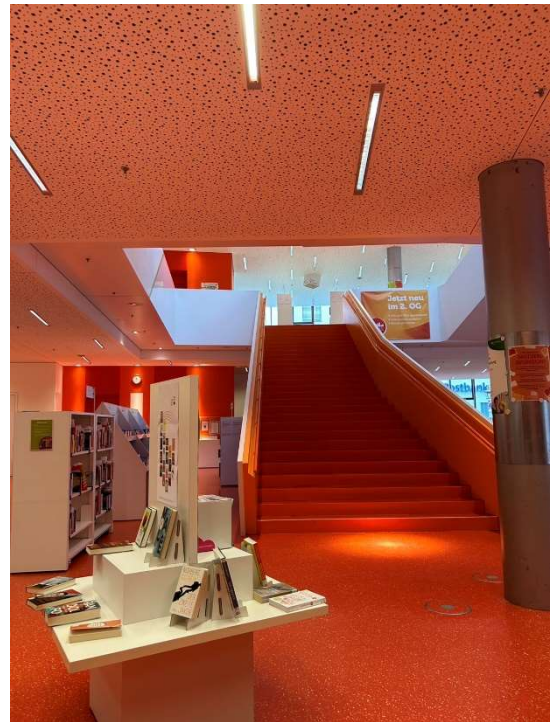
しかし、調査を進める中で、市の施設だけでなく、地域の民間団体や独自の施設も、公共政策や福祉の分野で重要な役割を果たしていることが明らかになりました。こうした背景を踏まえ、本報告書では、アウクスブルク市が運営する公共施設と、それを補完する役割を担う民間の施設や団体についても取り上げ、それぞれの役割や地域社会への影響を考察します。

今回は、具体的に「図書館」「職業訓練センター」「フッガーライ」の3つの施設に焦点を当て、それぞれの役割や地域社会への影響について分析します。

2. アウクスブルク市立図書館

私たちが今回訪問させていただいたのは、Stadtbücherei Augsburg(アウクスブルク市立図書館)です。この図書館は市民の憩いの場となることを目標としているそうです。外観は大きなガラス張りで、図書館

とは思えないモダンで開放的な見た目が印象的です。図書館の入り口近くにはカフェが併設されており、訪れた人々が気軽に利用できる工夫がされています。内装はオレンジと白を基調とし、明るく親しみやすい印象を与えます。また、子どもたちが自由に訪れ、勉強や遊びが行えるよう、話することができるスペースも用意されています。



図書館の内観

また所蔵物に関してですが、この図書館には本や雑誌だけでなく、漫画やDVDも配置されレンタルできるようになっています。特に漫画やDVDコーナーでは日本の作品を多く見ることが出来ました。さらに、図書館内にはボードゲームや楽器が演奏できるスペースも用意されていました。

そのため、アウクスブルク市立図書館は本を借りるための施設というよりは、公民館のような役割も担っていると感じました。

また、図書館の一角には、楽器、マシン、ゲーム機、スポーツ用品といった図書館ではあまり見かけることがないようなものが設置されているスペースがあります。このコーナーにある道具は、無料で借りることが出来るようです。この取り組みは、「なんでも購入するのではなく。まずは試してみしてから考える」という理念に基づいています。たとえば、新しい趣味を始める際に、高額な道具を購入して使わなくなるよりは、まずは図書館で借りて使うことで、持続可能な社会を目指す考え方で



レンタルできる様々な道具

このように、アウクスブルク市立図書館は市民や子供たちが利用しやすい工夫を多く取り入れています。しかし、この図書館の利用者は市民全体の12%程度にとどま

っています。利用者の多くは子どもであり、大人の利用が少ないことが課題です。

その要因としては、年間使用料があげられます。ドイツの図書館では18歳未満は無料で書籍などの貸し出しができますが、18歳以上になると年間20ユーロ支払う必要があります。そのため、この料金が大人の利用を妨げる原因になっているとも考えられます。

このようなことから、アウクスブルク市立図書館の取り組みは地域社会における多様な利用者のニーズに応えながら、持続可能な社会の実現に寄与する重要な役割を果たしていることが分かります。

3. 職業訓練センター

次に紹介するのは、訪問の5日目に見学させていただいた職業訓練センターです。この施設は、その名の通り職業訓練を行う場所で、主に16歳から27歳までの若者が通っています。ここでは授業を受けたり、企業での実習を組み合わせたりする「デュアルシステム」が導入されています。訓練生たちは週に1~2回ほどこのセンターで授業を受け、それ以外の時間は企業で実務経験を積む形です。

このセンターでは、約120種類の職業に関する授業や実習が設けられています。進路が決まらない若者や、どの職業に就きたいか迷っている人々は、センターのスタッフと相談しながら自分に合った道を模索します。このプロセスにより、参加者は自身のキャリアについて深く考える機会を得ています。また、訓練期間中には給料が支給される仕組みが整っており、基本的に3年

間でプログラムを終了することが目標とされています。ただし、中には5年や6年にわたり訓練を受ける人もいます。センター内には訓練生向けの寮が設置されており、遠方からの通学者や住居が必要な人々に対応しています。

また、この施設は職業訓練だけでなく、福祉的な役割も担っています。進路に迷う若者だけでなく、さまざまな理由で一度社会から外れてしまった人々を支援し、再び自立した生活へ戻れるようサポートする仕組みが整っています。職業訓練を通じて若者が社会的なつながりを持つことができるこのセンターは、社会福祉と教育を兼ね備えた重要な役割を果たしています。

4. フッガーライ

フッガーライは、2日目に訪問した場所で、世界最古の福祉施設として知られています。この施設は公共施設ではなく、15世紀の実業家ヤーコプ・フッガーが貧しい人々を救済するために設立したものです。設立当初から現在に至るまで、フッガー家の資金によって運営されています。

現在でも、フッガーライには住むことが可能で、年間88セント（日本円で100円ほど）の格安な家賃で住むことができます。ただし、居住にはいくつかの条件があり、アウクスブルク市民であること、経済的に困窮していること、そしてカトリック信者であることが求められます。経済的な状況については、市の調査ではなく、フッガーライ独自の事務所が審査を行います。また、住民はフッガーライ内の教会で祈りを捧げることが義務付けられており、これ

も伝統的な規則の一環です。



フッガーライ

フッガーライ内は一つの地区のような雰囲気、2階建ての長屋が整然と並んでいます。建物の入り口のドアには、街灯がなかった時代に住民が自分の家を見分けられるように、ユニークな形の取っ手が印象的な呼び鈴が付けられています。この歴史的な仕掛けは、訪問者に当時の生活を想像させる興味深いものとなっています。



呼び鈴の取っ手

また部屋の内部も見学することができました。当初、経済的に困窮している人々のための住居ということで、狭く質素な部屋を想像していましたが、実際は日本の一般的なアパートよりも広々としており、快適に暮らせる環境が整っていました。複数の部屋があるため、家族での生活にも十分対応できる作りとなっています。

フッガーライは、貧困層への支援と歴史的価値の両方を兼ね備えた施設として、現代に至るまでその役割を果たしています。訪問を通じて、500年以上にわたる福祉活動の伝統と、地域社会における寄付文化の重要性を感じることができました。

5. まとめ

今回の訪問を通じて、公共政策や福祉の多様な形態について多くの学びを得ることができました。アウクスブルク市立図書館では、図書館が単に本を提供する場ではなく、地域住民の交流や学びの場として重要な役割を果たしていることを実感しました。特に持続可能な社会の実現を目指した新しい貸出システムや子どもたちが気軽に利用できる工夫が印象的でした。

また、職業訓練センターでは、若者に職業訓練を提供するだけでなく、進路に迷う人や社会から一度離れてしまった人たちを支援する福祉的な側面を強く感じました。このような支援は、個人の自立を促すだけでなく、地域社会全体の安定や活力にも寄与していると考えられます。

さらに、フッガーライでは、500年以上にわたり続いてきた福祉活動の歴史的意義とその継続性に感銘を受けました。このよ

うな民間の取り組みが、現代の福祉政策にも重要な影響を与えていることを知り、公共政策と民間の福祉活動との連携の重要性を改めて感じました。

これらの訪問を通じて、公共政策とは必ずしも行政による取り組みに限定されるものではなく、市民や民間団体の活動とも深く結びついていることを学びました。公共施設と民間団体が共に支え合うことで、地域社会全体の福祉や発展が実現されるのだと感じます。今回の学びを通じて、今後も公共政策や福祉についてさらに深く考え、研究していきたいと思います。